

エンタメ

仙頭 武則

■ 続・極私的映画論

先月の「極私的映画論」続編として、今回はロシアの巨匠アンドレイ・タルコフスキー監督の「映像のイメージ」についてひもとく。

タルコフスキー作品の映像のイメージは「鏡」(一九七五年)など随所に見てとれる。近年では、メキシコのアレハンドロ・G・イニャリトゥ監督の「バルド、偽りの記録と一握りの真実」(二二年)冒頭の砂漠の俯瞰ショットに現れる影とその飛翔が好例。

「イメージ」は「印象」と用いられることが多いが、辞書には「心に思い浮かべる像や情景、心像」とある。著書でタルコフスキーは語る。「正確に対象を記録することは、全く(映像の)イメージとはほど遠い。観察したものを、客体から受ける自分の感

「イメージ」の連鎖で成立



筆者が所蔵するタルコフスキーの「鏡」

覚であるかのように見せることなのだ」。映像のイメージとは「象徴的な映像」であり、その象徴的な映像の連鎖が映画なのである。一連のショットでカメラを横に動かす「パン」や、カメラを被写体に近づけたり遠ざけたりする「ドリー」など撮影技法も含め、表現方法は多様で正解があるわけではないが、大切なのは「動いていなければならぬ

い」ことである。座して考え込んでいる人の表情を長々と「撮り、映す」ことではない。

映画は「人間」を描くことにほかならないが、すべては視覚的表現であり、人間の行動、しぐさなどで「動き」を撮り、映す。せりふである言葉はその行動を示すためにあるのであって、せりふとしての言葉の真意を推察することが映画の面白さではない。「こう言っているけど、本当はこう思っているんだな」と解き明かして、合点する必要はない。なぜか。それは、映っていないからである。

これは次回最終掲載「映画ドラマツルギー」で説明したい。ドラマツルギーとは「作劇法」のこと。作る法を知ることで見ることへつながる。(名古屋学芸大学教授、映画プロデューサー) 次回掲載は三月十六日)